

ひとりだけひとりじゃない

福島県

富岡町少年剣道団

中学1年 小林 凜太郎

二〇二二年四月、ぼくは中学生になった。と同時に富岡町少年剣道団の団員は僕だけになった。五十年ほど前に始めの一步をふみ出し、百人以上いたこともあった団員が、今やぼくひとり。しん災でバラバラになってしまった後も先生方が環境を整えてくださって続けてくることができた。四年前から富岡町の武道館も使えるようになった。でも、長かった月日は元のように戻らないのが現実。それはぼくにもわかる。一才だったぼくが中学生になったのだから、もう育ったところが故郷になっているだろう。だからといって、それをなげいているわけではない。むしろ、富剣のたったひとりの団員としてほこりをもって続けている。こうなることは入団した時からわかっていたことだし、覚悟の上で続けてきたからだ。

館長先生が、ぼくのことを心配してくれて

「凜太郎は、他の道場でお世話になってやった方がいいんじゃないか。ひとりはかわいそうだべ。」

と、父に話したことがあった。父はもちろん、変える気持ちはなかったと思うが、ぼくのこれからを考えるとその方がいいのかという思いはあったのだと思う。

「凜太郎はどうしたい。」

父に聞かれて、

「富剣で続けたい。」

と即答したことを覚えている。他の選択は考えられなかった。その時は、兄達もいたし、頼りになる先輩達もいた。稽古は厳しかったけれど、必ず力になると信じていた。なにより富剣は、剣道を始める前からずっと一緒に育ってきたぼくのホームだ。ホームを出ることなんて考えられなかった。

だが、いざひとりになってみると、富剣の歴史と先輩達の築いた伝統を一身に背負っているようなプレッシャーを感じ、不安と緊張でいっぱいになった。そんなぼくの気持ちも知らず、兄達は、

「凜、富剣として出られる試合は個人戦だけになっちゃうけど、少ないチャンスをつかめよ。これからの富剣を頼んだぞ。応援してるからな。」

はげましの言葉だったのだけれど、余裕のないそのときのぼくには、「それがプレッシャーなんだよ。ひとの気も知らないで。」と文句を言いたいくらい兄達の気持ちを素直に受け止めることができなかった。

そんな気持ちをもったまま過ごしていた今年六月、三年ぶりに全国道場対抗剣道大会の

県の予選会が行われた。富剣のワッペンをついた剣道着、試合用の富剣胴、富剣の手ぬぐい、そして大事な富剣小林の名札。久しぶりの正装に身も心も引きしめる思いがした。そして、いつもの自分よりちょっと強くなった感じがするのはなぜだろう。そう思いながらいるぼくに、他の道場の先生方や友達が声をかけてくれた。

「久しぶりだな。」「大きくなったな。」「どうだ調子は。」「がんばれよ。」

うれしかった。でも、うまく言えないけれど、普通のうれしさではなかった。「なんだろう。この気持ち。」「ああ、そうか。」どうやらぼくの心のどこかにさみしきや心細さがあったみたいだ。だから、声をかけてもらえて、ひとりだけひとりじゃないという気持ちになれてうれしかったのだ。富剣で剣道を続けていたからこそ築けたたくさんの縁。もう大丈夫。仲間がいる。

これから三年間、富剣の名札をつけて試合に出ることはあと何回あるかわからないけれど、その度にきっと、引きしめる思いと心強さを感じることだろう。ぼくのやることはひとつ。しっかりと富剣の教えを守って稽古に励むこと。そして、その教えをいつか今はまだいない後輩につないでいけるまで、

「気合い出していくぞ。」